

## 複数講師に対しての質問・コメント

質問	<p>講師の皆様へ質問です。</p> <p>興味深い講義をしてくださりありがとうございました。自分はまだ1年生ですが、2、3年後にはコース選択をしなければなりません。同じ学科内でも魅力的なテーマが数多く存在しており、その中から一つのテーマを選ぶことに不安を感じています。いくつかの興味のあるテーマの中から、今先生方が研究されているテーマを選んだ際のきっかけのようなものがあれば教えていただきたいです。</p> <p>当日は他の講義とかぶってしまい参加できないので、可能であればwebページにて回答していただきたいです。</p>
嶺岸回答	<p>自分の場合、学部時代と修士時代、博士時代、およびポストドク時代ではそれぞれ研究テーマが異なります。具体的にいえば、学部時代はM. ハイデッガーの1930~40年代の講義録について、修士時代にはJ.G. フィヒテの知識学、博士時代にはヘーゲルの論理学と宗教哲学、ポストドク時代にはヘーゲルと新プラトン主義の関係について取り組んできました。ただしこれら別々の対象に取り組んできた際の関心となるものは一貫して、〈自分自身であるとはどのようなことなのか〉という問題であり、この問題における知の役割でした。このような経験からしますと、自分の問題関心だけはどのような対象に取り組むのであっても一貫させるのがよい、ということでしょうか。研究というものは、5年や10年のスパンである程度かたちにすることが出来ます（学部の4年、あるいは修士の2年を加えるとちょうどそれくらいの長さとなります）。かたちとなった研究をさらに生かすには、その都度新たな対象や領域に向かう方がよいです。その方が、かつて考えていた問題に再び出会い、思いがけない糸口をつかむことが出来るかもしれません。</p>
松平回答	<p>レジリエンスという概念に興味を持ったきっかけは、私自身が自分を感情の不安定な人間だと思ったことです。私が落ち込んだりイライラしたりするような出来事をなんでもないことのように越えていける人がいること、多少落ち込んだりイライラしてもすぐに立ち上げられる人がいることを不思議に思いました。</p> <p>複数のテーマに魅力を感じる場合は、そのテーマに所属する人(特に研究室の教授)の人間性を重視すると思います。テーマが面白くても人間関係で困ったら元も子もないので。また、選んだテーマとは違うテーマに興味を持った時、その新テーマとの融合を許してくれる環境かどうかを確認しておくと思います。</p>
中安回答	<p>私の場合は、当日もお話したように、小学生の頃の京都議定書の採択と学部二年生の頃の東日本大震災が大きなきっかけでした。あるテーマを選んでしまったからとしてもそれを一生やり続ける必要はありませんし、どんどんやりたいことを変えていけばよいと思います。実際、私は博士課程にやっていたテーマを基盤にはしているものの、現在の研究とは大きく異なります。また、やりようによっては、複数のテーマも同時にできるものです。人生に欲張りであってよいと思います。</p>
當真回答	<p>中学生のときにテレビで見たNHKスペシャル「アインシュタインロマン」に衝撃を受けて、宇宙物理学を志しました。大学では物理学を専攻しました。大学院は最初、別の物理学の研究室に入りましたが、半年で思い直して、宇宙物理学の研究室に入り直しました。しかし一つの研究室で学んだことは今にも活用できています。一つのテーマを選んでもそれをずっとやっていくとは限りません。むしろ複数のテーマを順にやっていく(どれもその時々で真剣に取り組んで)ことで、研究のユニーク性が高まります。私の周りにも、分野を変えた人が研究で活躍している例がよくあります。</p>

高木回答

学科やコースなどの選択は、その後の人生の展開に決定的な影響を与えるように思えるため、慎重にならざるを得ません。それに伴い、様々な不安が生じることもよく理解できます。ところで、「入門」という言葉がありますが、どの「門」を選ぶかがいま問題になっているわけです。一つの門から入ったところにどのような光景が広がっているかは、確かに入ってみないと分からないものではありませんけど、殆どの場合、奥のほうは大きな広場になっていて別の門から入ってきた人もいます。広場では、それぞれの門からそこに至るまでの道を歩いているうちに培った術（わざ）をもった人たちが協力して大きなものをつくっています。このように想像してみると、門の選択は重要ですが、決定的ではないと気づきます。

門も金箔を施したもの、赤いもの、黒いもの、石造りのもの、木製のもの、様々です。門の選択にあたって、ある生物学者が仰ったことをお伝えしておきたいと思います。1980年代半ば、「バイオ」ブームが起こり、生物学科の人气が高まりました（当時の学生たちには金ピカの門に見えたのです）。その先生は、成績がよいから生物学を専攻するという学生が増えて困っていると仰いました。中には実験に向いていない者もいて、器具を壊すということでした（確かに、魅入られたように無意識のうちに物を壊すように扱ってしまう人がいます）。皆それぞれ得手不得手、向き不向きがあります。弱点を克服するための訓練は辛いものですが、その分野が好きならばそれに耐えられます。門の見かけではなく、その先に心惹かれるものがありそうだと感じられるかどうかは自分の心に訊いてみてください。

わたくしは理学部数学科の卒業ですので、工学部の学生とは随分違う教育方針のもとで学びました。あまり参考にはならないとは思いますが、研究課題を絞り込むまでに至る過程は、だいたい以下のようなものでした。50年前の東北大学は、入学すると2年間教養部の学生になり、3年目から学部の所属となるという制度でした。学部に「進学」するためには、現在の全学教育科目に相当する教養部の講義を決められた単位数以上履修する必要があり、履修単位数が足りないと留年となりました。専門教育科目は余り多くは開講されていなかったもので、意欲的な学生は同好の士に呼びかけ「自主ゼミ」を組織して、学部に進学してから学ぶような高度な内容の本を輪講したりしていました。さて、数学科のカリキュラムは、2年生の後期から専門の科目の講義が始まり（週2日だけ）、3年生は講義と演習だけ、4年生は講義とセミナーですが、セミナーでの発表の準備に殆どの時間が割られました。どのセミナーを選ぶかが、大きな分かれ目の一つです。入学後最初の2年間は“ボーっと生きていた”ため、3年次の講義はどれも難しく分かった気がしませんでした。代数学、幾何学、解析学の三分野のうち、解析学が相対的に最もよく理解できたように思えたので、セミナーはその分野の中から選びました（消極的選択）。学力不足のため大学院は不合格、1年間浪人して基礎学力を鍛え直し、ようやく合格。そして偏微分方程式論の講座の教授の研究室に入れてもらいました。研究分野としては、4年次のセミナーの延長線上にあります。偏微分方程式論を選んだ理由は、それが微分積分学成立後の近代数学の核心となる研究対象の一つだと分かったからです。その頃(1970年代半ば)、偏微分方程式論の主要な研究対象が線型偏微分方程式から非線型偏微分方程式に移っていく時期でした。わたくしは、流体力学の基礎方程式である Navier-Stokes 方程式（非線型）についての数学理論を学び、当時発展途上であった「分岐理論」を Navier-Stokes 方程式にどのように応用するかを研究していました。その頃、とある研究会で反応拡散方程式系に関する講演を聴いた同じ講座の先生が、こんな面白い問題があるけど、研究してみないかと声をかけて下さいました。そして分岐理論を適用して小振幅ではありますが非定数定常解を構成することができました。こうして振り返ってみると、研究方向を決めるのも具体的な研究テーマを選ぶのも、きっかけは非常に受動的なものでした。ただ、なぜ声をかけていただいたかという、非線型方程式の研究のために重要な方法の一つであると当時考えられていた分岐理論について詳かったため、こいつでもまずは取っかかりとなる成果くらいは挙げられるかも知れないと考えていただいたのではないかと思います。いずれにせよ、羽ばたくまで辛抱強く待ってくださった恩師とずっと励ましてくれた同じ研究室の友人たちのおかげです。このような幸運な出会いがなければ、数学を研究する職には就いていなかったと思います。